特効薬としてではなく、常備薬としてのミュージアム

今村 信隆
北海道大学プラス・ミュージアム・プログラム代表
北海道大学文学研究院准教授

ミュージアムに期待される役割や機能は、近年ますます多様に、そして専門的になってきています。もちろん、資料の収集・保存・展示といったこれまでの仕事は、今後も変わらず、ミュージアムにとって重要なものであり続けるでしょう。しかし、それらに加えて今日のミュージアムには、従来は縁遠いものと考えられていたさまざまな役割が、新たに期待されるようになってきました。たとえば、観光の振興や地域の活性化、街並みやコミュニティの再生もしくは創成といった課題に、博物館が積極的に貢献しようとする事例が着実に増えています。また、人びとの幸福や健康、福祉、社会包摂、持続可能な社会の実現といったさまざまな領域も、博物館が寄与しうる新たなフィールドとして注目を集めているところです。このような変化は、具体的な個々の事例において認められるだけでなく、国内外を問わず、ミュージアム界の大きな流れ、あるいはうねりになっているように感じられます。日本の博物館法が改正され、さらに国際博物館会議ICOMで新しい博物館の定義が採択されたのが奇しくも同じ2022年だったということは、そうした変化の潮流を象徴的にあらわしていると言って差し支えないでしょう。

このたび、2022（令和４）年6月にはじまった「北海道大学プラス・ミュージアム・プログラム」も、このような流れのなかで生まれてきたものです。もともと北海道大学文学研究院では、2018（平成30）年度から2020（令和２）年度にかけて、「北海道大学学芸員リカレント教育プログラム」（通称「学芸リカプロ」、代表：佐々木亨・本学文学研究院教授）という事業を実施してきた実績があります。これは、ミュージアム関係者の学び直しの場をつくることを目指したプログラムであり、3年間を通じて約40名の参加者を受け入れて、さまざまな活動を行ってきました。今回のプラス・ミュージアム・プログラムは、この学芸リカプロを発展的に引き継ぎ、地域の課題にさらに積極的に踏み込んでいく事業であると、わたしたちは位置づけています。

北海道大学プラス・ミュージアム・プログラムのキャッチコピーは「ミュージアムを足してみる」というものです。その言葉の通り、本プログラムでは、人びとの人生や地域社会のさまざまな課題に身近な博物館の力をプラスすることを目指すべく、順次事業を進めています。また、これまではミュージアムとの縁が薄かった専門領域、たとえば財政学や会計学、ブランド論などの知見をミュージアムにプラスしてみることも、本プログラムのもうひとつの大きな柱です。

2022年7月30日に開催されたキックオフシンポジウム「ミュージアム発の幸福論」では、本学の寳金清博総長や藤田健文学研究院長にも御挨拶に立っていただき、全学的な支援を得ての船出となりました。また、その後も全国各地からお招きした講師の皆様や、さらにはさまざまなところからオンラインを通じて聴講して下さる参加者の皆様にも支えられながら、どうにか1年目の事業を着地させることができそうな見込みです。その成果の一端は、2022年度の報告書であるこの『Report１』でもご紹介しています。

ところで、ミュージアムが、現代社会をとりまく課題の解決や、現代を生きる人びとの幸福の実現に何かしら貢献できるのだとすれば、それはなぜなのでしょうか。もちろんミュージアムは、どんな問題でもたちどころに解決してしまえるような、便利な「特効薬」などではありません。ミュージアムに出来ることは限定的です。それだけでは社会全体を劇的に変えていくことはできないとも言えるでしょう。

ただ、ミュージアムに出来ること、あるいはミュージアムだからこそ出来ることが、きっとあるようにも思います。わたし自身がいま考えているのは、いうなればミュージアムは、何でも解決できる「特効薬」としてではなく、個人やコミュニティに確かな安心を与える「常備薬」のようなものとして、じわじわと効いてくる力をもっているのではないかということです。複雑な現代社会のなかにあって、科学や技術や芸術は、肥大化し、あるいは細分化して、目まぐるしく移り変わっていきます。わたしたちの日常をとりまく情報はあまりにも膨大で、もはや通常の想像力ではとらえ切ることも難しそうです。そうした科学や技術や芸術、あるいは情報を、もう一度個人のライフ（生活／生涯／生命）やコミュニティの現実と出会わせてくれる場がミュージアムなのではないでしょうか。そうしたミュージアムの底力を、2年目以降の本事業の活動においても、参加してくださる皆様と一緒に探っていきたいと願っています。